

道德教育用
郷土資料集

小学校

ふるさと

志

ふるさと

高知県教育委員会

はじめに

私たちのふるさと高知には、緑豊かな山、流れ清らかな川、雄大な海など豊かな自然があります。私たちのふるさと高知には、受け継がれてきた素晴らしい伝統や文化があります。私たちのふるさと高知には、あたたかな関わりを大切にし、思いをつなぐ人たちがいます。

この本の資料には、そうしたふるさとの自然、伝統や文化、人々の関わりが描かれています。ふるさとに思いを寄せてみてください。

きっと、みなさん一人一人が、ふるさとへの思いをあたためることでしょう。

ふるさとは、みなさんがふるさとを大切にし、夢や希望をもって未来に向かってたくましく生き抜いていくことを願っています。

それが、ふるさとの志です。

しょうがっこうどうとくきょういくようきょうど しりょうしゅう
 小学校道徳教育用郷土資料集 「ふるさとの志」
こころざし

【第1・2学年】

- 1 ピーマン いただきます！ 1
- 2 イチヨウの こえ 5
- 3 こいのぼりの ニド 9

【第3・4学年】

- 4 ふるさとの味 土佐文旦 13
- 5 妙見山のちかい — 岩崎弥太郎 — 17
- 6 風にのって 21

【第5・6学年】

7	紙づくりの偉人 <small>いじん</small> — 吉井源太 <small>よしいげんた</small> —	25
8	おじいちゃんのはち	29
9	ふるさとのあかり	33



1 ピーマン いただきます!

「ごちそうさま。」

「あれ、ゆきこちゃん、ピーマンのこしちゅう。」

あきらくんが、ゆきこさんのおさらをのぞきこんで、いいました。

「ピーマン あんまり すきじゃないが。」

ゆきこさんは、たちあがって、しよつきをかたづけに、いきました。

どう日^び。ゆきこさんは、れんげのさくたんぼのあぜみちを、あるいていました。すると、ビニルハウスのなかから、きん



じよの はまだの おじさんが あせを ぼたぼた おとしながら
でてきました。

「うわあ、おじさん、すごい あせや。ハウスの なかは、そんな
に あついが？」

「ああ、ゆきこちゃんかよ。ピーマンは、もとは あつい ところ
で そだつ やさいやきね。ハウスの なかの おんどを たか
くしちよかんと いかんき。」

「ふうん。なかで なに しょったが？」

「ハウスの なかを みてまわって、むしが ついちゅうのが あ
ったら のけゆうがよ。ほかに ひろがらんようにね。」

「ハウスの なかを ぜんぶ みよったが？ むしを いっぺんに
たいじする くすりを かけたらえいろう。」

「はっはっはっ、そうやねえ。ゆきこちゃんは、ピーマン すきか

よ。」

「えっ、まあまあ。」

「まあまあかよ。ゆきこちゃんにもたべてもらいたいき、がんばらないかんねえ。」

ゆきこさんは、おじさんのかおからおちるあせをじっとみつめました。

すいよう日。きようは、きゆうしよくのまえに、えいようしのせんせいはなしをしてくれる日^ひです。

「きようは、ピーマンのはなしです。こうちけんは、ピーマンのとれるりようがぜんこくだい^{さん}三^{さん}い^{さん}です。このやさしいため





の ビーマンは、このまちの はまださんが そだてた もので
す。あんぜんで おいしい ビーマンを たべてほしいので、の
うやくを つかわずに そだてたそうです。」

「あっ……。」

ゆきこさんは、はっと しました。

そのとき、にっちよくの あいずが き

こえました。ゆきこさんは、いつもより

おおきな こえで

「いただきます！」

と いいました。

おさらの なかの ビーマンを みると、

あせ いっぱいの はまだの おじさんの

かおが うかんできました。

2 イチヨウのこえ

「どうして ことしは、きんいろに ならんがやろう。」
おじいさんは、イチヨウの 木きを みあげて 木の おいしやさ
んに たずねました。

「きよねん、イチヨウの 木の ちかくに みちを つくる こう
じを したとき つちを ほりかえして、ねが ちぎれた
ようです。このままでは、かれてしまうかも しれません。」
木の おいしやさんは、イチヨウの 木に てを あてて いい
ました。

むらの ひとたちが おまつりの ときに あつまる ひろばに
は、ことし ひやくさいに なる イチヨウの 木が あります。
とても おおきな イチヨウで、あきに なるまばゆいほど

きんいろに はを いろづかせます。

おじいさんや おむらの ひとたちは
イチヨウの 木を ながめては きせ
つの うつりかわりを かんじていま
した。その イチヨウが、ことしは、
あきに なっても いろづかない ま
ま かれた はを ちらせていくので
す。

「なみだのようじゃ。」

おじいさんは、まいおちる はっぱ
を じっと みつめました。

つぎの日から、おじいさんは、つちを ほりかえし、ねに えい
ようの ある くすりを 入れる さぎようを はじめました。



けれども、つちは、かたく なかなか ほりおこすことが できません。イチヨウは、日に日に よわって、さいごのはっぱを ちらせました。

おじいさんは、その はっぱを そっと にぎって、イチヨウの木を みあげました。

「がんばるんじやぞ。」

おじいさんは、ちからを こめて つちを ほりかえしました。

そのうち、むらの ひとたちも あつまってきた。

「むらの イチヨウやき、わしらも いっしょに やるぜよ。」
おじいさんや むらの ひとたちは、かぜの日も ゆきの日も

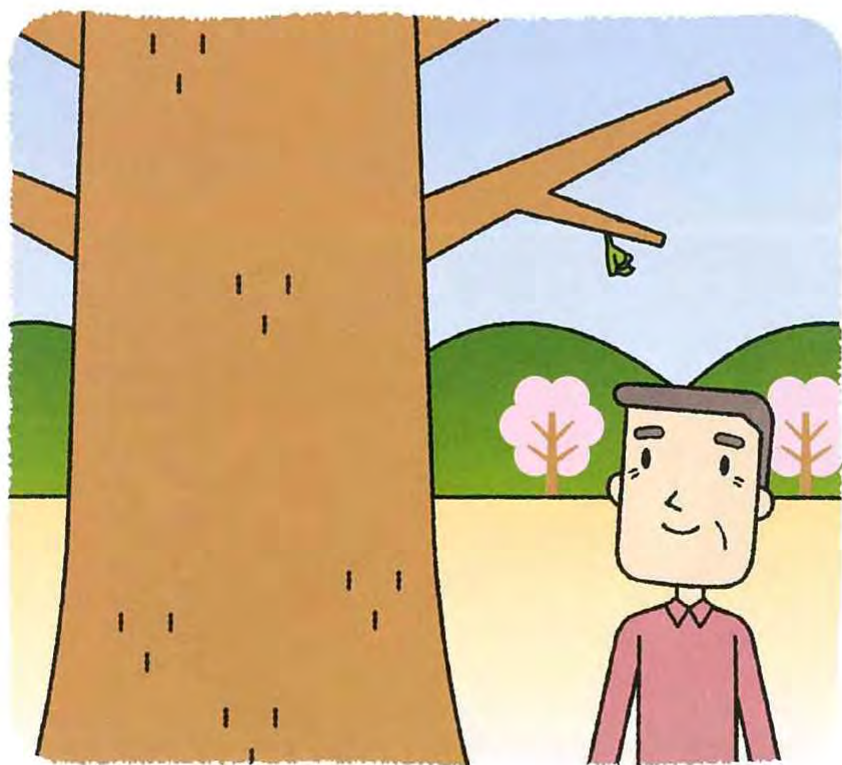


ふゆの あいだじゅう さぎょうを つづけました。
はるに なりました。

いつものように イチヨウの
ようすを みにきていた おじ
いさんは、あっと おどろきま
した。

ちいさな ちいさな イチヨ
ウの めを みつけたのです。

「おじいさん、ありがとう。」
イチヨウの こえが きこえ
たような きがして おじいさ
んは、にっこりと ほほえみま
した。



3 こいのぼりのニドにと

ぼくは、こいのぼりのニド。でも、よいでいるのは、そらじゃない。によど川がわっていうほんものの川かわなんだ。

ぼくが うまれたところは、いのちやう。ぼくは、みずにつよい とくべつなかみで できているんだ。いのちやうは、むかしから によど川の きれいな みずをつかって、いろんな かみを つくってきたからね。

このまちの「こいのぼりクラブ」のひとたちは、一いちねんかけて ぼくたちか



みの こいのぼりを たくさん つくってくれているよ。

「いのちようと いうたら かみの こいのぼりと おもうても
らえるように たくさん およがせたいねえ。」

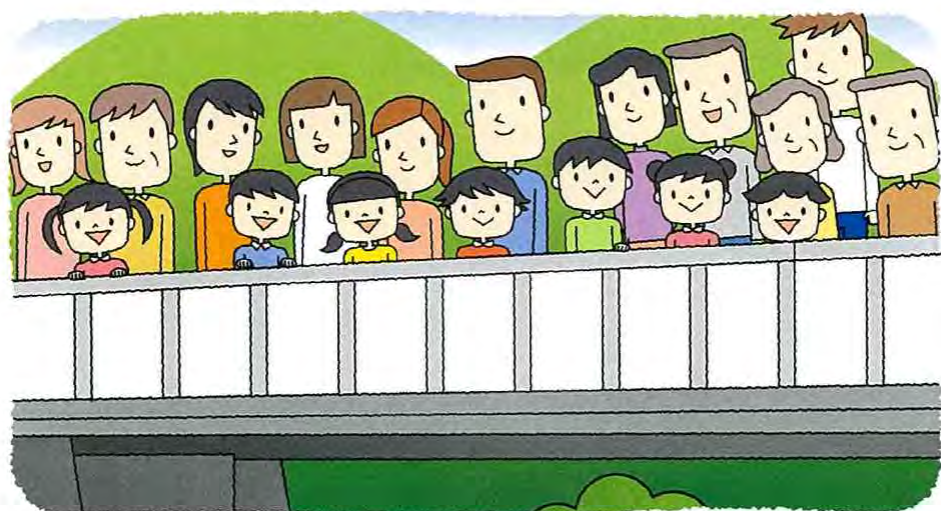
おじさんたちの はなしが きこえてくる。ぼくは、目を きよ
ろきよろ させながら、なかまが ふえていくのを みていますよ。
まいとし 五月ごがつの「によど川 かみの こいのぼり イベント」
の 日ひが くと、ぼくたちは いっせいに によど川ばしの し
たで およぎはじめる。

さあ、ことしも、たのしみな日が やってきた。

ぼくたちは、そおと 川に はいった。

「ひゃっほう、つめたあい。でも、きもちが いいなあ。」

「ニド、川の なかが よく みえるね。」



「けっこう ながれが はやいねえ。」

「ちよつとや そつとじゃ おっぽも せ

びれも とれないよ。ぼくらは、かみの

まち いのちようの うまれだあい。」

ぼくも なかまたちも おおはしやぎだ。

なんたって、はしの うえには、たくさ

んの おきやくさんが いる。

「うわあ、にじいろの 川や。」

「川も、こいのぼりも、きれいやねえ。」

「ほんとうに およぎゆうみたい。」

「こりゃあ すごい。しやしんに とっち

よこう。」

こんな こえが きこえてくると、ます

まず おねを はって およぐんだ。

ぼくは、この きれいな によど川も、ぼくたちを つくってく

れた まちの ひとつた
ちも だあいすき。も
ちろん 川を およぐ
なかまもね。みんな
ぼくの じまん なん
だ。

みんなも みにきて
ね。にっぽん一 げん
きな かみの こいの
ぼり ニドを！



4 ふるぎとの味あじ 土佐文旦とさぶんたん

「高知は、ぬくいき、くだものもそだちやすい。今までだれも作ったことのない、高知生
まれのくだものをそだててみたいが。」

昭和十八年（一九四三年）のことです。土佐市戸波とさしへわのう家 宮地正憲みやじせいけんさんのおじいさんは、食りようをふやすために作っていたさつまいもをやめて、くだものをそだててみ
いと、知り合いの人にそうだんしました。

「文旦というのがあるけれど、まだ、日本では作られやせんき、うまいことそだったら、
高知生まれのくだものになるかもしれん。」

「文旦か。よし、それを、そだててみようか。」

おじいさんは、さっそくくだものの試験場しけんじょうから文旦のなえ木を手に入れて、はたけにう
えました。ところが、その三年後、おじいさんは、なくなっていました。

正憲さんのお父さんは、びよう気でなくなっていたので、正憲さんが、おじいさんの思
いをうけついで、文旦のなえ木をそだてはじめました。昭和二十一年（一九四六年）、正

憲さん、二十四才のときでした。

「じいさん、文旦をそだてて、高知を代表するくだものになるよう広めていき。」

しかし、そのころ、文旦のそだて方を教えてくれる人は、だれもいませんでした。

「なんで、葉が黄色うなっちゅうがやろう。ひりょうのやり方が、いかんがやろうか。」

正憲さんは、一本一本ようすを見てまわり、ひりょうのりょうをちようせつしました。

えだがぶつかるほどそだつと、実がつきやすくなるように、なえ木を何本か切って、木の間を広げました。

さむさで、木がかれそうになったときには、六十本ほどある木の根にわらをかぶせたり、木の皮がはげたところにくすりをぬったりしました。

「ふう。ほんとにそだつがやろうか。」

手に息をふきかけながら、はたけを見わたしていると、おじいさんのことを思い出しました。



「あきらめるわけにはいかん。」

正憲さんは、毎日せわをつづけました。そして、とうとう七年目の冬に、文旦は、黄色い実をつけました。食べてみると、みずみずしくて、あまさとすっぱさがちょうどよく、さわやかな味がしました。

「じいさん、できたぜよ。これが文旦や。たくさんの人に食べてもらうきねえ。」

正憲さんは、文旦を自てん車につんで、高知市内のくだもの店に売りに行きました。ところが、店の人は、

「おきやくさんは、文旦を知らんき、まずは、食べてもらうてからじゃないと売れん。一こ売るには、一こ食べさせんといかんき、そんをする。」

と言って、文旦をおいてくれません。
(やっとできた文旦やのに……。)

正憲さんは、じっと文旦を見つめました。

「やっぱり、あきらめるわけにはいかん。」





土佐文旦

正憲さんは、一日中、自てん車で、くだもの店や青果市場せいかをまわりました。荷台にの文旦はおもく、風はつめたく、自てん車は、なかなかすすみません。正憲さんは、ぐっと力をこめ、顔を真まっ赤かにして自てん車をこぎました。

「あら、また来たかよ。」

店の人は、正憲さんの顔を見つめました。

「そうか、分かった。ほんなら、ちよっとおいていきや。」

「ありがとうございます。」

こうして、文旦をおいてくれる店がだんだんとふえてきて、そのおいしさがしだいに広まっていきました。

正憲さんが、そだて広めた文旦は、高知生まれのくだものとして、「土佐文旦」と名前がつけられ、今では、高知を代表するくだものになっています。

5

妙見山のちかい

— 岩崎弥太郎 —

一八三四年、土佐（今の高知県）に生まれた岩崎弥太郎は、まけん気が強く、勉強熱心な若者でした。弥太郎は、よく、近くの妙見山に登り、目の前に広がる太平洋を見つめて、「海は大きいこのう。もっと勉強して、この海のおここの世界を相手に仕事をしたいのう。」

と、ゆめをえがいていました。

弥太郎が二十一才のころのことです。弥太郎に、江戸（今の東京都）で勉強をするチャンスがやってきました。しかし、弥太郎の家のくらしは、たいへん苦しく、弥太郎が江戸で勉強するためのお金はありません。

「こんなくらしの中で、ゆめをもっても……、どうせ無理じゃ。」

弥太郎は、これまでがんばっていた勉強を、しだいになまけるようになりました。そんな弥太郎に、母は、

「近ごろのおまえは、どうした。勉強をなまけては、いかん。」

と、声をかけました。

「勉強したってむだじゃ。わしの思いは分かってもらえん。わしのゆめは……。」

弥太郎は、そうさけぶと妙見山の頂上^{ちようじょう}までかけ登り、海をじっとにらみつけるのでした。

そんなある日のことです。母は、弥太郎をよび、つつみをさし出しながらしずかに言いました。

「弥太郎、これをもって行きや。」

「これは何じゃ。」

「山を売ったお金じゃ。このお金で江戸へ行って勉強してきいや。」

母は、父と相談^{そうだん}して、家のたった一つのざいさんである山を売って、お金をつくったと言うのです。

「そんなことをしたら、これからのくらしがこまるろう。どうしてそんなことを……。」



「弥太郎……、子のねがいを大事だいじに思わん親は、おらんきね。」

弥太郎の目には、なみだがうかび、ぬぐってもぬぐってもあふれてくるのでした。

江戸に旅立たびつ前の日、弥太郎は、妙見山の頂上に立ちました。目の前に広がる海に、父と母の顔がうかんできます。

「わしの心には、この海より大きい父と母の思いがある。その思いにこたえたいんじゃ。わしは、ゆめをかなえるまで、この山には登らん。」

そうちかいを立てた弥太郎の目に、その日の海は、いちだんと大きくうつるのでした。

その後の弥太郎には、苦しい出来事できごともたくさんありました。江戸での勉強も、江戸へ行った次つぎの年には、大け



岩崎弥太郎（国立国会図書館蔵）



がをした父を助けるためにあきらめなくてはなりませんでした。

それでも、どんなときも妙見山のちかいをわすれなかった弥太郎は、いろいろな所で出会った人たちから商売の仕方や外国のことを学びました。

そして、やがて、国内だけでなく外国も相手に仕事をする海運会社をつくり、「東洋一の海運王」とよばれるほどになりました。

父と母の思いを心にきざんで立てたあの日のちかいは、弥太郎が海を見つめてえがいたゆめをかなえる大きな力となったのです。

（出典 小学校道徳 読み物資料集 文部科学省）

6 風にのって

「ひかる、いっしょに集会所しゅうかいしょに行かんか。風たこを作りゆうとこを見てみんかよ。」

土よう日の昼すぎのこと。おじいちゃんがにこにこして話しかけてきた。

ぼくのおじいちゃんは、土佐風保存会とさたこほぞんかいに入って三十数年、風作りをしている。冬が近づくと風の話ばかり。ぼくには、あまりきょうみのない話だった。

「ゲームしゆうき、えい。」

テレビゲームの画めんを見つめたまま答えた。

「そうか……。ほんなら、一月の風あげだけでも見にきいや。」
おじいちゃんの小さな声がせなかごしに聞こえた。

十二月。日ぐれは早く、あたりは、すっかりくらかった。

「ただいま。おうい、ひかる、おじいちゃんは？」
お父さんの声だ。



「まだ帰ってないが？ 凧作りに集会所に行っちゅうと思うで。」
「もうすぐ七時や。お父さん、ちよっとむかえに行ってくるき。」
「えっ、ぼくも行く。」

昼間のことを思い出してあわててくつをはき、近くの集会所まで走った。

集会所のドアのすき間からは、ぼんやりと明かりがもれている。ぼくは、そのすき間から中をのぞいて、いっしゅん息をのんだ。うすぐらい明かりの中で、目を細めて、ふで先を見つめているおじいちゃんが見えた。たてよこ五メートルほどの凧にあざやかな色をぬりかさねている。ぼくが見たことのないしんけんな顔だ。となりでは、男の人が、もくもくと竹を組み合わせている。ギョツギョツと、竹のきしむ音だけがはりつめた空気の中にひびく。ぼくは、そのようなすをじっと見つめた。

「もう帰らんかよ。」

お父さんの声におどろいて、おじいちゃんが顔を上げた。



帰り道、空気がほおにつめたい。

「おじいちゃん、凧作るのって、おもしろい？」

「はっはっはっ。ひかる、土佐凧の作り方は江戸時代えどじだいからつたわるがよ。和紙わしをはり合わせたものに絵をかくて、それから、竹骨たけぼねにはりつけて凧糸をつける。かんたんに言うたらこんなもんやけど、さっき作りよったたみ十六じょう分の大きい凧やったら、強い風にあおられてもささえられるように、竹も五年ばあかけてかわかしたものをつかう。四百年をこえてつづくこの土佐凧を、おじいちゃんも、まもっていきたいんや。」

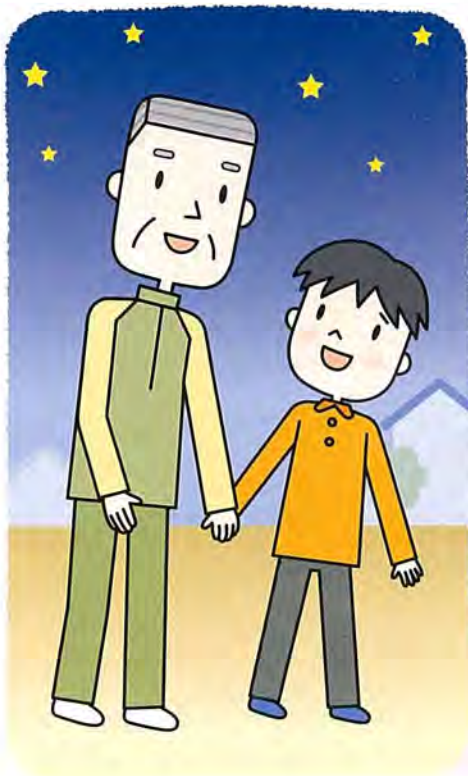
ぼくは、さっきのおじいちゃんのしん

けんな顔を思い出した。

「おじいちゃん、ひやかっただろう。」

「だいじょうぶぜよ。」

ぼくの手をにぎったおじいちゃんの手がつめたかった。ぼくは、思わずおじいちゃんを見上げた。





土佐凧

一月、凧あげ大会の日。天気はよく、青空が広がった。

「お母さん、凧、見に行ってくる。」

「おじいちゃんは、凧あげる言うて、朝早うから行っちゅうで。」

「うん。ぼくも行ってくるき。」

川ぞいの広場には、もうすでにおおぜいの人があつまっていた。

大人十人ほどが、おとなたたみ十六じょう分の土佐凧につながれたつなをかけ声とともにぐ

いぐいと引く。すると、風にあおられて凧がふわりとうき、

ゆっくりと空にあがった。

「おおー！」

はく手とかんせいがいっせいにおこる。

大空にまう凧をじっと見ていると、

「土佐凧をまもっていきたいんや。」

風にのっておじいちゃんの声が聞こえたような気がした。

ぼくには、凧がますます大きく見えた。

7 紙づくりの偉人——吉井源太——

坂本龍馬さかもとりょうまや岩崎弥太郎いわさきやたろうと同じ時代を生きた吉井源太は、一八二六年、吾川郡伊野村あがわぐんいのむら（今のいの町）に生まれました。家は、代々、紙すきをしていたので、源太は、小さいころから紙のすき方を習い、十四才になると、自分でも紙をすけるようになりました。

源太が三十三才のころのことです。江戸えど（今の東京都）に行つて、紙の消費量を調べたところ、ずいぶんたくさん紙が使われていることを知りました。

「こりゃあ、これからますます紙がいるようになる。けど、今の道具じゃあ、いっぺんに二まいしか紙がすけん。紙の質しつを落とさんずつ、今までの二倍、三倍の紙をすけんもんじゃろうか。」

源太は、二まいすきの小さな「すき具*」を見ながら考えました。

「そうじゃ。ほんなら、いっぺんにもっとたくさんすける新しいすき具を作ってみろうか。」

源太は、すぐに新しいすき具作りに取りかかりました。朝から夕方まで、紙をすき、夜になると、自分の部屋の戸をしめ、研究に熱中しました。何度も何度も図面を書き直し、いろいろな大きさの枠わくを作つては、その具合を試たしました。

「いかん。こんなに道具を大きゅうしたら、持ちにくくなる。どうしたもんかのう。」

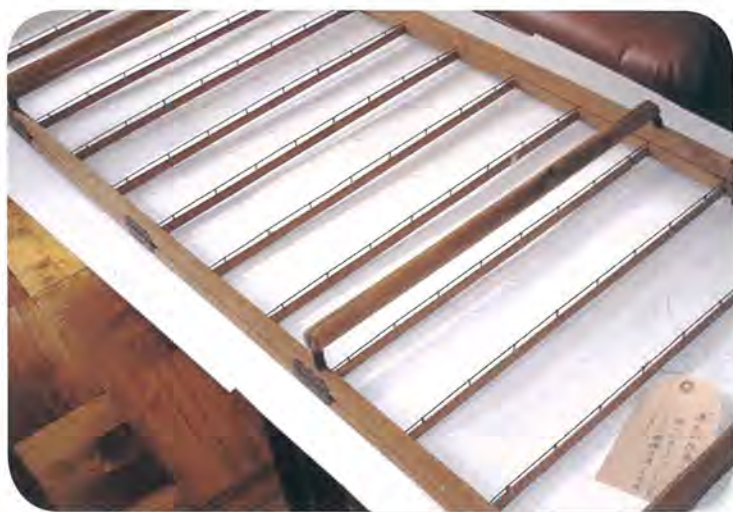
源太は、来る日も来る日もすき具作りに打ちこみ、どんな体かくの人でも持てるよう、持ち手をつける工夫もしました。

研究は、三年の間、休みなく続けられ、とうとう、源太は、これまでだれも見なかったことのない大型の「けた」と「す」を完成させました。それが、「土佐の大桁」とよばれるすき具です。

源太の発明によって、一度に、六まいから八まいの紙がすけるようになり、土佐では、紙づくりがますますさかんになりました。

しかし、源太の紙づくりにかける思いは、とどまることはありませんでした。

「この大型のすき具で、もっとうすい紙をすけんもんじゃろうか。うすい紙やったら軽いき、たくさん運ぶのにもえい。けんど、うすうすでも、すぐやぶれるようじゃいかん。もっとうすうすで、強い紙をすいてみたいが。」



源太が改良（かいりょう）した「けた」

土佐典具帖紙



源太は、年月をかけ、次々と工夫を重ね、うすい紙を開発していききました。

「これは、まっことうすい紙や。」
と、周りの人が言っても、

「まだまだじゃ。工夫しだいでもつとつとすい紙ができる。」
と、冬の冷たい水に手を入れて、紙すきを続けました。作業場からは、ザツ、ザツ、ザブンという紙をすく水の音がとだえることはありません。

「ようし、これでどうじゃ！」

源太は、他の地域ちいきですかれていた紙

を参考にし、原料のこうぞの量を調節したり、すき方を工夫したりして、ついに、厚さあつ〇・〇三ミリ、紙のうすさの限界げんかいをきわめた「土佐典具帖紙※とさてんぐじょうし」をつくりだしたのです。源太、五十五才のことでした。

この紙のすばらしさは、日本だけでなく、外国にも知られるほどでした。その後も、源太は、インクのにじまない紙や水に強い紙など様々な紙を



つくる工夫を続けました。

「一筋ひとすじに 往ゆくと思えど 臃おぼろかな」

(これまで紙づくり一筋にがんばってきたけれど、やりきってはいない。まだまだやりたいことがある。)

これは、源太、六十九才の句くとされています。

源太は、八十三年の生涯しょうがいにわたり、二十八種類もの新しい紙せい品をつくりました。そして、それらは、世界各地の博覧会はくらんかいで、次々と入賞を果たしました。



吉井源太

源太のふるさとこの町は、今も紙づくりがさかんで、「紙の町いの町」とよばれています。

※すき具：「けた」や「す」を組み合わせた紙をすく道具

※土佐典具帖紙：別名「かげろうの羽」。世界一うすい手すきの紙とされ、文化財ざいや美術品じゆつぽんの修復しゆふくなどに使われている。

8 おじいちゃんのはち

ドン、ドドン、ドン、ドドン、ドット、ストトン。和太鼓の音がひびき始めた。ピーヒヤラー。笛と金の音も加わった。

七色の紙が四すみにかざられた舞台の上は大蛮があらわれると、観客は、いっしゅん声をひそめ、大蛮を見つめる。しだいに大きくなる太鼓のひびきに合わせ、大蛮は、所せましと動き回り、時折舞台を強くふみ鳴らす。カッと開いた大きな口、見るからにおそろしい面の大蛮が、初参りの子どもをむねにだき、舞い始めた。

和太鼓や笛、金の音に合わせて舞う大蛮の舞は、千年も続く伝とう神楽「津野山古式神楽」の舞の一つであり、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。



大蛮

ぼくの父は、津野山古式神楽保存会ほんかくいで和太鼓を打っている。最近さいきんは、太鼓のたたき手はめつきり少なくなっていた。

神楽保存会のみんなは、毎週月曜日の夜、役場のホールに集まって太鼓や囃子はやしの練習れんしゅうをしている。父は、そこで太鼓を教え、みんなが帰ると、夜おそくまで一人で太鼓を打つ。

(練習れんしゅうせんでも、上手じょうずやのに。)

「津野山一の太鼓打ち」とよばれる父が、十数年も休みなく練習れんしゅうをしているのが、ぼくは、ふしぎだった。

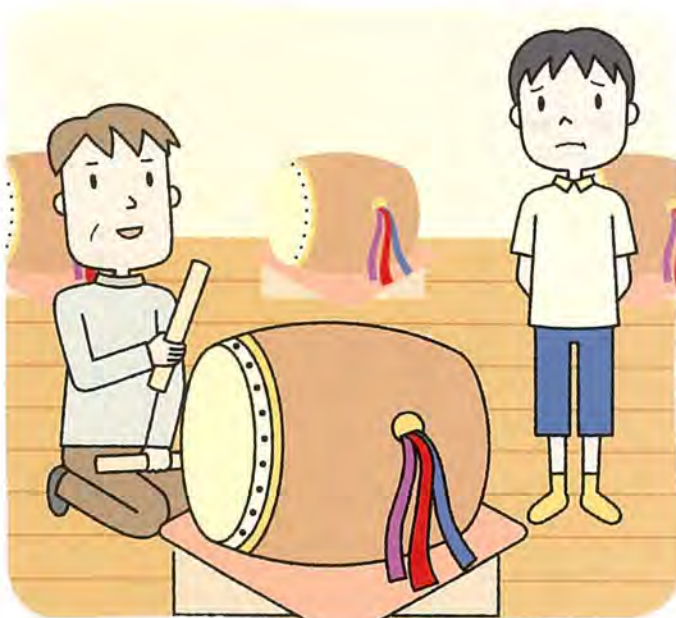
「正男まさおも太鼓を打ってみんかよ。」

父は、よく声をかけてくる。

「う、ううん。」

父の太鼓を聞くと、ぼくには、とても打てる気がしない。ぼくは、ばちをにぎらなかつた。

ドン、ドドン、ドン、ドドン、ドット、ストトン。
ぼくが、学校から帰ると太鼓の音が聞こえてきた。



「ただいま。」

「おう、おかえり。」

太鼓を打つ手を止めて、父が顔を上げた。

「正男、今日は、おじいちゃんの命日じゃろう。」

「あっ、そうや。」

ぼくは、おじいちゃんのこと覚えていない。ぼくが生まれてすぐなくなったと聞いている。

「正男の初参りのとき、おじいちゃんが太鼓を打ち、それに合わせて、大蛮が正男をだいて舞うたがよ。それは、力強いすばらしい太鼓やった。おじいちゃんはそのころ、具合を悪うして、ねこんじよったけど、『孫のめでたい初参りに太鼓を打たんようじゃ、津野山の太鼓打ちじゃない。』言うて、みんなが止めるのも聞かんずつ太鼓を打つてのう。」

そう言うとき、父は、太鼓を打ち始めた。しだいにもり上がるリズムとテンポ。軽快けいかいなばちさばきからくり出される音に、聞いているものはひきこまれる。

父のばちさばきは、だれにもまねできない。

ドドン、ドン、ドン、ドン。大きくばちをふり上げ、太鼓の音は、やんだ。

すると、父は、にぎっていたばちをぼくの手のにぎらせた。

「このばちは、おじいちゃんにもろうたばちよ。おじいちゃんみたいな太鼓は打てんと、太鼓打ちをいやがっちゃったわしに、おじいちゃんがくれた。」



「おじいちゃんのばち……。」

「正男の初参りの日、それは見事な太鼓を打ち終えた後、おじいちゃんは、たった一言、『心をこめたらえいだけじゃ。』そう言うて、ばちをにぎらせてくれた。おじいちゃんが太鼓を打ったのは、あれが最後じゃった。正男、津野山太鼓は、みんなが元気にくらせることを願うて、心をこめて打ったらえいがじゃ。」

父の太鼓が、なぜ聞く人の心を熱くするのか、初めて分かった。

あせのしみこんだ二本のばちを、ぼくは、力をこめてにぎりしめた。

※初参り…お宮参りとも言い、赤ちゃんのたん生を祝い、元気に成長できるようにとお願いする行事

9 ふるさとのあかり

「けんじ、何をのんびりしゆうぞね。ちようちんつけに行かないかんろう。」
母さんの声でした。

「わかつちゆう。」

ゆつくり起き上がって、テレビを消した。

ぼくの住んでいる物部地域ものべちいき（香美市物部町かみしものべちよう）には、

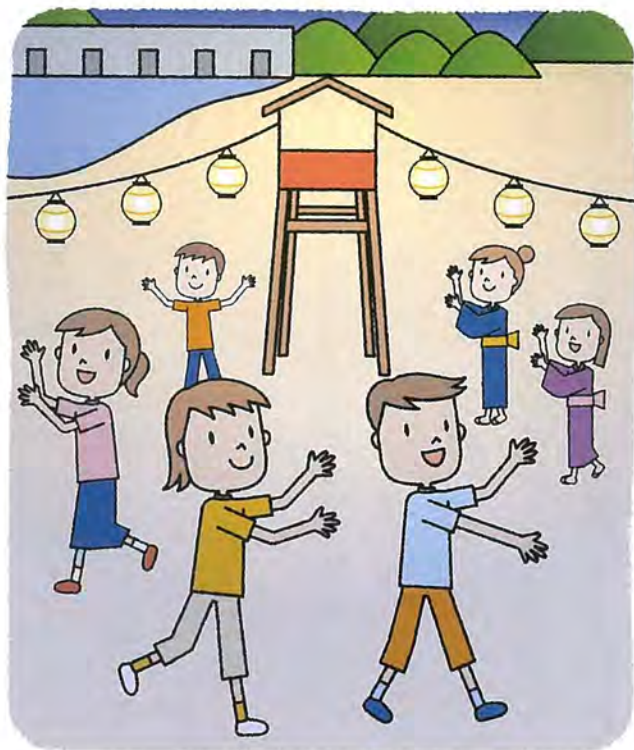
湖水祭こすいりという地域の祭りがある。祭りの日にもすちようちんのじゅんびをするのは、毎年、子ども会の役目だ。

集合場所につくと、みんなは、電球にちようちんのかさをかぶせ、一つ一つ、ひもにしばりつけていた。

「けんじ、よう来た。はようちようちんつけてよ。明日は、いよいよ湖水祭りやきねえ。たのむぞね。」

近所のふさばあさんが、いそがしそうにちようちん





を運びながら声をかけてきた。ふさばあさんは、子ども会の世話もしてくれている。今日は、いつもにもましてはりきっている様子だ。

（夏休みなのに、何でぼくらあがせないかんが。お祭りだけやったらえいの……。）
手にしたちょうちんをピシヤツとどじた。ちょうちんのじゅんびは、夕方近くにやっと終わった。

よく日、湖水祭りの日。

日もくれ、周りの山々は、すみ絵のように美しく、ともされたちょうちんのあかりは、ほたるのように見えた。

あかりをたどって、祭り会場に着くと、あちこちから声が聞こえてくる。昨日までと同じ町とは思えないほど多くの人が集まっていた。

けれど、山なみにこだまする声につつまれ、会場には、なぜだか、おだやかな静けさがただよっている。

「元気がえ？」

ふさばあさんが、話しかけていたのは、ぼくの知らない人だった。

「おお。ふさばあも元気がえ？　ここに帰ってくるとほっとする。」
うなずいたふさばあさんの目元が、いっしゅんゆるんだように見えた。

「間もなく、とうろう流しが始まります。」

放送の声にうながされ、ぼくは、湖のほとりに行った。

「ばあちゃん、今日は、人がいっぱいやねえ。」

ぼくは、とうろうをながめているふさばあさんの横にすわった。

「けんじ、五十年前、この湖の底には、町があつてね。ダムができることになって、多くの人^がここをはなれた。けんじ、祭りの日には、こうやってみんなあ帰ってくるがよ。」

「もう、昔の家もなんちゃあないのに。」

「そうやねえ。それでも、とうろうをながめゆうと見えてくるがよ。あそこに家があつて、学校があつて……。にぎやかな声が聞こえてくるような気がするき。」

ふさばあさんは、とうろうを見つめたままだった。

「ばあちゃんが昔、住んじよった家も、湖の底や。」

「えっ、ばあちゃんの家も。」

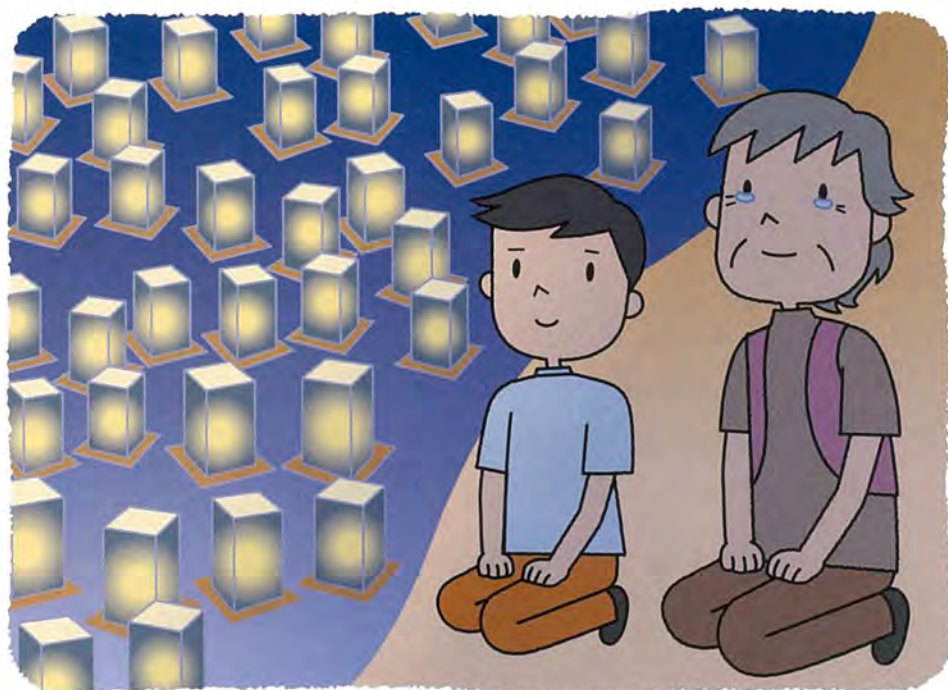
おどろいてふり向くと、ふさはあさんの目に、とうろうのあかりがゆらゆらとゆれているのが見えた。

「みんなが、このとうろうをながめながら、この町のことを思う。町はダムに消えても、ふるさことを思う気持ちまでは消えやあせん。」

ちようちんのあかりに照らし出されたふさはあさんの目に、なみだがたまっていた。

「ばあちゃん、とうろう、きれいやね。」

ぼくは、湖面のとうろうをじっと見つめた。



小学校 道徳教育用郷土資料集「ふるさとの志」

平成24年3月 発行

発 行：高知県教育委員会

編 集：高知県教育委員会事務局小中学校課

TEL：088-821-4638

FAX：088-821-4926

志